

言葉の重さ

小 六

あなたは車いすの人や白じょうを使っている人を見かけたら何を思うだろうか。日常生活を送るだけでも大変そうだとか、困っていきそうだったら声をかけようとか考えるだろうか。体の自由な人を見かける機会は少くない。実際に声をかけ、お手伝いをした人もいるだろう。それでは体の自由な人の家族に対してはどうだろう。まず、見ただけでは分かるはずもないし、声をかけることもないだろう。何かを思うことも、考えることも。

私のお父さんがお母さんと結こんすと決めたとき、周りの人たちはみんな

な反対したそうだった。お母さんは生まれ
たときから左手が不自由だったからだ。
絶対に苦勞する、子どもができたらど
うするつもりだ、などと口々に言われ
た。お父さんもお母さんと知り合った
ときに、体が不自由な人に対してどの
ように接していけばいいのかなやんだ
そうだった。重い荷物を代わりに持ったり、
家事の全てをしたりとお父さんがお母
さんの左手になるつもりで、できる限
りががんばった。しかし、お父さんのし
たことはお母さんの左手からリハビリ
の機会をうばってしまったのだ。
お母さんの左手は、使わないとどんど
ん固くなって今よりも動かなくなっ
てしまふ、と教えてもらったお父さんは
自分の情けなさを痛感した。そして何
も知らなかった自分に、知ろうと努力

すらしてこなかった自分に気が付いた。こうしてお母さんと家族になることを決めたお父さんは、周りの声など少しも気にならなかった。それでもお父さんは忘れられないと言う。あのときの反対する言葉や態度は、まるでお父さんも体が不自由な人であるかのようにだったと。

結こんをしてからもお父さんは、周りの人から好奇こうきの目で見られ続けた。同情的な言葉をかけられることも多々あった。そんな日々でも、お父さんは笑い続けた。理由は簡単だ。今までお母さんの左手に向けられていた言葉や視線から、お母さんを守ることができるようになったからだ。それと同時に知ることができたのだ。体の不自由な人たちがどの様に思われているのかを。

今でもお父さんはよく口にする。無知な自分に気付けたお父さんは幸せだ、お母さんといっしょになれて本当によかったと。

お母さんのように生まれたときから体が不自由な人もいれば、病気やけがが原因で手が動かなくなってしまう人、足が動かなくなってしまう人など、一人一人がかかえている問題はちがうと思う。今日、健康だからといって明日も健康でいられるとは限らないはずだ。それなのに、今現在、自分は健康だからと何も考えず生活している人はたくさんいるだろう。きっと自分が何らかの障がいを負い、今まで通りの日常を送れなくなったとき、初めて真けんにどのようなように生活をしていくか考えるとと思う。そして気が付くだろう、

かけられる言葉の重さに。

健常者と体の不自由な人との差はすごく単純である。それは、今ある自分の能力で生活に支障があるか無いか、だけなのだ。そのわずかな差が原因でお母さんは学生時代にいじめにあい、大人になってからも限られた仕事しか任せてもらえないといった大変な思いをしてきた。それでもやはりお母さんは笑っている。その笑顔はお父さんと何も変わらない。お母さんに向けられたひどい言葉よりも、優しく温かい言葉の方が世界にはたくさんあふれていると、お母さんは知っているから。

だれ一人として望んで体が不自由になった人はいないと思う。しかし、だれでも望めば体の不自由な人と家族になることはできる。そのことを今日も

鼻歌を歌いながら台所に立つお父さんが教えてくれた。私たちが普段口にす
る言葉の重さを、大切さを。今日も朝早くから会社へ行くお母さんが教えてくれた。助けてもらうのは当然ではない。いつも感謝の気持ちを忘れてはいけないことを。

私が生まれてからお父さんが主夫を、お母さんが仕事をしている。きつと普通の家とはちがうのだろうと思う。でも私はこの少し変わった家族が大好きだ。いつも笑顔があふれている家が好きだ。世の中にはたくさん言葉が存在している。同じ言葉でも人によっては傷ついてしまう可能性があることを私は知っている。それほど言葉は難しく、そして何よりも重いのだ。私の口から出る言葉が、私の書く言葉が、

誰にとっても優しく温かい言葉であるようにこれからも生きていこうと思う。

学校から帰り、百点を取ったテストをお母さんに見せる。よくがんばったね、とお母さんは左手で私の頭をなでてくれる。台所で料理をしているお父さんと目が合う。二人とも、今日も笑っている。だから私も笑おう。

「ありがとう。」

お母さんの左手に、私は言った。